
初春『あ、あの時はありがとうございました//』一方通行『.....あア?』

.

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初春『あ、あの時はありがとうございました／＼』一方通行『…あア？』

【Nコード】

N90510

【作者名】

・

【あらすじ】

初春が一方通行にときめいちゃうお話です。

ヤンデレ系、シリアス成分が含まれるだろうかと思われます。

あとキャラ崩壊が多少あります。

苦手な方はすみません。

再開編

初春飾利という少女は勇気を振り絞ってずっと探してきたあの人に伝えた。

あれは五分前のことだっただろうか。

???『あれ？路地裏探検してたらいつの間にか恐い人たちに囲まれてるよ、ってミサカはミサカは啞然としてみる……。』

不良A『やべｗｗｗｗ超俺等好きなガキだぜｗｗｗｗ』

不良B『マジだｗｗｗｗ』

???『わ、私はそんな目で见られる対象にはならないと思うんだけど、ってミサカはミサカは戦々恐々としてみる……。』

不良C『俺たちロリコンなんだよｗｗｗｗ諦めなお嬢ちゃんｗｗｗｗ』

初春『そこまです！ジャッジメントです！』

迷子を捜して通りかかった路地裏だった。
まさかそこでこんな光景を見ることになるとは思ってもみなかった
が……。

不良A『ジャツジメントだあ？』

不良に絡まれている女の子には見覚えがあった。
名前までは思い出せなかったが、あの特徴的なアホ毛を忘れること
はない。

初春『もう大丈夫だからねアホ毛ちゃん！』

アホ毛『ミサカには打ち止めて名前があるの！ってミサカはミサ
カは猛然と抗議してみる！！』

ああ名前は打ち止めだったな。
まあ今はそんなことはどうでもいいか。

初春『さあ大人しくし……。』

不良A 『恐くねえんだよ花畑がw w w w』

不良B 『いきがってんじゃねえよw w w w』

不良C 『お前ら落ち着けてw w w w恐がってんじゃねえかw w w w
てか意外とストライクゾーンじゃね？w w w w』

予想外の反応だった。

初春 『ちよつ、ちよつと…止めてください！』

打ち止め 『お姉ちゃんが逆に襲われてる！？助けに来てアナタ！つ
てミサカはミサカはあの人に来てくれないか本気で願ってみる！！』

その時杖の音が路地裏に響いた。

??? 『てめエら何してンだよ。』

初春にはその顔に見覚えがあった。忘れようが無かった。
だってあの理不尽な暴力の地獄から救ってくれた人だったから。

あの白い髪を忘れるはずが無いのだから。
ずっと探していたのだから。

不良A 『何カツコツケちゃってんだよこのクソモヤシはw w w w』

??? 『おいクソガキ。俺がどんだけ捜し回ってやったと思ってや
がンですかア?』

打ち止め 『うう……ごめんなさい、ってミサカはミサカは平謝りし
てみる。』

不良B 『いやいやw w w w何無視してくれちゃってんの?このクソ
モヤシw w w w』

??? 『……ウザってエな。おいクソガキ、帰ッたらオシオキだア。
』

打ち止め 『お仕置きだけは止めてほしいかも、ってミサカはミサカ
は上目遣いをお願いしてみる……。』

不良C 『帰れると思ってんですか?w w おいお前らこのモヤシやつ
ちまおうぜw w w w』

不良A B C 『ヒッハーw w w w』

カチッとスイッチが入った音が響いた。

初春は今見たばかりの光景に我を忘れていた。
それがあまりにも不思議な光景だったからだ。

あの人は一步も動いていなかった。
なのに不良達の攻撃は全て当たらなかった。
文字通り指一本触れることすらできなかったのだ。

あまりの能力の差に不良達は逃げ出してしまったが、
放心状態の初春はそのことにすら気付かなかった。

「……………つとにくだんねエなア。」

打ち止め『アナタありがとう！！』ってミサカはミサカはアナタが助けに来てくれたタイミングに運命を感じて赤面してみたり／＼

???『意味わかんねエこと言ってたら置いて行っちゃまうぞ。』

打ち止め『アナタの受け流しにミサカはミサカはうなだれてみたり……。あつ、あとお姉ちゃんもありがとね！ってミサカはミサカは感謝してみる！！』

打ち止めの言葉に初春はやっと我に返ることができた。

あの人が行ってしまふ。

既にだいぶ離れてしまっていた。

あの人の後ろを打ち止めが急いで追いかけている。

今気持ちを伝えなければもう会えない気がした。

初春『あ、あのう……。』

ダメだ。聞こえていない。

彼女は勇気を振り絞ってできるだけ大きな声を出した。

初春『あのっ……!!』

???『……あア?』

声に気付いたあの人が立ち止まってくれた。
初春は急いで彼に近づいた。

初春『あ、あのっ…… / /』

???『……だから何だっつてんだア?』

打ち止め『どうしたの? ってミサカもミサカも心配してみる。』

初春『こ、この前のことと言い、今回のことと言い、助けてくださ
って本当にありがとうございます / /』

???『……この前のこと?』

打ち止め『そっか! お姉ちゃんは一方向通行に助けられてたもんね、

ってミサカはミサカは一人で納得してみる!」

一方通行……?

あのレベル5第一位の?

打ち止め『……ってことがあったでしょ、ってミサカはミサカは物忘れが激しいアナタに呆れてみたり。』

一方通行? 『あア。ンなこともあつたような……。』

それが本当に彼の名前なのだろうか?

打ち止め『やっとわかったのかな? ってミサカはミサカはちょっと疲れたかも……。』

一方通行? 『おい。そこの女ア。』

初春『は、はい!』

話が終わったようだ。

だが少し不意打ち過ぎた。

焦って返事をしたためか声は若干裏返ってしまった。

一方通行？『正直あんまり覚えてねエが、別に感謝される必要はねエよ。ンじゃな。』

たったそれだけ？

初春は戸惑ってしまった。

確かに感謝の気持ちは伝えられたが、自分のありったけの気持ちはたったあれだけの言葉で返されるとは思ってもみなかったからだ。

初春が無言になったのをどう解釈したのか、また一方通行は歩きだし、打ち止めは彼のすぐ後に着いていった。

初春『ちょっと待ってください！』

自分でも驚いた。

とても大きな声が出たことに。

何故か胸が痛んだことに。

そして、何よりもまず、無意識のうちに彼を呼び止めてしまったことに。

一方通行？『……チッ。まアだ何か用があるんですかア？』

初春にもわからなかった。

感謝の気持ちは伝えたはずだ。

それが目的だったのではなかったか？
だとしたら何も用はないはずなのに。

初春『え、えつと……。』

まずい。

何か言わなくちゃ。

初春『せつかくですし、メアドでも交換しませんか……？』

は？

自分は何を言ってるのだろう。

一方通行？『……はア？』

どうやら彼も啞然としているようだ。

打ち止め『いいじゃないアナタ、ってミサカはミサカは携帯をちよつと拝借!』

一方通行? 『おい! 何勝手なことしてやがるクソガキ!!』

打ち止め『はい送信完了! ってミサカはミサカはアナタに初めて友達ができたことを喜んでみたり!!』

気が付いたときには私は携帯を出し、データを受け取っていた。
データを見るかぎり彼は一方通行で間違いないようだ。

友達……。

そうか新しい友達ができたからこんなに胸がドキドキしているんだ。
それに一方通行と言えば誰もが知っているレベル5の第一位。
こんな友達ができたのだから、ドキドキしない方がおかしいじゃないか。

一方通行『……ケツ。くだらねエ。』

打ち止め『お姉ちゃんのお名前は何ていうの？ってミサカはミサカは可愛く尋ねてみる。』

初春『初春、初春飾利です！』

どもってしまったのも緊張のせいだろう。
だってこんな人と友達になれたのだから。

一方通行『メールしてくんのは勝手だが返すつもりは1ミリもねエからな。』

一方通行はそう言うツカツカ杖を付きながら歩いていく。

打ち止め『あつ待ってよアナタ、ってミサカはミサカは……。』

遠ざかっていく足音と話し声を聞いて初春はやっと緊張から解放された。

あまりに脱力してしまつてその場に座り込んでしまった。
だが胸はまだ高鳴っている。
仕方ないだろう。

だってあんな人と友達になれたのだから。

そう友達に……。

戸惑い編（前書き）

正直、超電磁砲最終回しか見てないんで佐天さんの口調がおかしいかもしれませんが大目に見てやってください。

戸惑い編

一方通行と再開した次の日は日曜日だった。

初春飾利という少女はとあるファミレスにいた。

取り合えず目に付いたケーキセットを注文し、残りのメンバーを待つ。

今日は前から約束していた、みんなが集まる日。

楽しくお喋りをして楽しく買い物をしたりする特別な日。

久しぶりにみんなが集まる。

初春自身もずっとこの日を楽しみにしていた。

だが、今の彼女にはのんびりと今日を楽しめるだけの余裕はない。

店員さんがケーキセットを彼女の席に運んできた。

彼女はケーキを一口口に運び、昨日からずっと考え続けている間い掛けを再び自分に投げつけた。

一体どんなメールを送れば、あの人はメールを返してくれるのか？

彼女は彼がメールを返すつもりはないと断言したことを覚えているのだ。

だからこそ、何とかして彼からメールが返されるようなインパクトの強いメールの内容を考える必要があるのだ。

もっとも、彼女にはレベル5の第一位が好みそんな話題など到底想

像できない。

だから昨日から何度も、ああでもないこうでもないと堂々巡りの考え事を繰り返しているのだ。

それにしても自分にも疑問に思えることがある。

いくら恩人とは言え、何故ここまで必死に考えているのかわからなかった。

それに彼のことを考えると、昨日のように胸がドキドキするのだ。

昨日は目の前に彼がいたから緊張したはず。

では何故、彼宛のメールの内容を考えるだけでもこんなに緊張してしまうのだろうか？

「……い。ちょっと初春ってば！何回呼べば気付いてくれるのかね……。」

初春「……え！？あつすみません！ちょっと考え事を……。」

佐天涙子。彼女と同じ中学の同級生であつて、彼女の親友と呼べる存在。

まさか、目の前で人が、それも佐天さんが話しかけてきていることにすら気付けないほど考え込んでいたとは思っていなかった。

佐天『あははっ。一体何考えてたんだか。うん？初春今日はパフェじゃないの？初春らしくないねえ。』

初春『た、たまには別の甘いデザートが食べたかったんですよ。それに私〃パフェみたいな言い方しないでください！！』

佐天『……何か今日の初春変だよ？何ていうかいつも以上に落ち着きがない気がするな。……まさか考え事って！？』

初春『いつも以上って何ですか！それと変なこと考えないでください！！』

と言いつつも初春は心の中で苦笑していた。
確かにそわそわしているのかもしれない。

昨日ついに探し続けてきた人に会えて、さらにはメールアドレスまで手に入れることができてから、彼女はずっとこの調子だった。
親友の佐天さんにはすぐにバレてしまったようだ。

さすがだなと思いつながら初春は、ニヤニヤと笑いつながら検討外れの推論を語り始めた親友の顔を見た。

待ち合わせ時間に少し遅れて白井黒子と御坂美琴は到着した。

御坂『本当にこういう時には黒子の能力は役に立つわね。遅れてゴメンね。』

白井『お姉様があの類人猿と喧嘩などなさらなければ五分前には着けていたのに……。』

御坂『あ、あれはアイツが悪いじゃない！！こつちが話し掛けてやったのに無視してスーパ―の特売なんかに行こうとするから……。』

佐天『御坂さんはもう素直になっちゃえばいいんじゃないですか？ニヤニヤ』

御坂『なっ……。！？べ、別にアイツはそんな対象じゃないっていうかその……。』ゴニョゴニョ

白井『お姉様安心してくださいまし。不肖白井黒子、我が身に代えてでもお姉様の操はお守りいたしますわ。いや、むしろ私が頂くというのもありで…』

御坂『あんたはどうしていつもそういう方向に話を持っていくのよ！！』ビリビリ

白井『ああお姉様の愛のムチ痺れますわああ！！』ハアハア

いつも通りのテンプレなやり取りだ。
ここまでではそうだった。

佐天『あっ！そう言えばついに初春にも春が来たみたいですよ！！』

騒ぎが一段落した頃、佐天さんは思い出したようにこう言った。

……え？

白井『ほう。あの初春がですか。どのような殿方が是非とも教えて頂きたいものですわ。』

御坂『初春さん。ちょっと詳しく教えなさいよ！』

まずいことになっているかもしれない。

御坂さんではないが私は一方通行さんをそんな対象だとは考えていなかった。

彼はただ単に私の恩人であって、そして……。

ん？

そして何なのだろう？

昨日は友達になれたと思っていたが、それは違いかもしれない。
友達ならたかがメールごときでウジウジするはずがないのだから。

何というかよくわからない。

私は一体彼のことをどう思っているのだろうか？

彼は一体私にとってどんな存在なのだろうか？

ただ一つわかるのは……。

佐天『黙ってるのは肯定だつてとらえちゃうからね！』

白井『初春。焦らすとはよほど話したくない殿方ですの？まさかツ
ンツン頭の類人猿では？』

御坂『……！ちよっ、ちよっとアンタ何言ってるのよ！！違っでし
よ初春さん！？』

白井『お姉様必死ですの……。』

この状況はそう簡単にはごまかせそうにないということ。
御坂さんを安心させるためにも取り合えず何か言わなくては……。

初春『そ、その皆さん何か勘違いしてますよ！私はただ、以前助けて頂いた命の恩人に昨日偶然出会っただけです。その人のことを考えててボーツとしてたら、佐天さんが勘違いしちゃって話を大きくしただけですよ。あと、その人は御坂さんが思い浮かべてる人じゃありませんのでご安心を。』

一息でこれだけ言い切るのはさすがに疲れてしまった。
初春はすぐにケーキセツの紅茶の残りを全て飲み干し、喉の渇きを癒した。
これでみんなは納得しただろうか？

御坂『……何て言うかアイツみたいな人もいるのね。それにしても……。』

白井『ボーツとしちゃう程その殿方のことを考えるとというのはつまり……。』

佐天『結局気になってるって言っちゃってるようなもんじゃん初春

……。』

聞かされてみるとそうとしかとれないような発言だった。

これは言葉のあやなのか、それとも自分の本音なのか。
自分でもわからない。

初春『あつ、皆さんそろそろ移動しないと映画に間に合わなくなりますよ!』

あらかじめ映画のチケットを買っておいて良かった。
多少強引だったがこれで話題はそれるだろう。

佐天『おつ、もうそんな時間か。まあ移動中も話すことは出来るし
ね……。?』

今日は佐天さんが悪魔に見えた。

会計を済ませてから映画が上映される場所に着くまでは地獄だった。その会話の中で、私は今度の日曜にその恩人を今日のファミレスに呼ぶ約束をしてしまった。

これ以上の詮索は今日はもうしないからという取り引きだったが、よく考えてみたらあまりにひどい2択だったようだ。

佐天さんは間違いなく覗きにやってくるだろうし、今日の話に興味を持ったらしい御坂さんまで来るかもしれない。

でも。

取り合えずメールの内容を決めることはできた。

日曜に来ないのならそのことをメールしてくれるだろうし、来るのならそれはそれで悪くない。

もっとたくさん話せるかもしれない。

みんなにはある意味感謝すべきなのかもしれないなと思ったが、口に出すとまた何か大事になりそうなので黙っておいた。

今日は映画と買い物をみんなと心から楽しめそうだ。

一方通行編（前書き）

ちよいとキャラ崩壊します。

一方通行編

一方通行という少年と打ち止めという少女はとあるレストランで夕食を食べていた。

打ち止め『アナタは本当にいつもお肉しか食べないのね、ってミサカはミサカは呆れてみる。』

一方通行『……ンなことは別にどうでもイイだろ。黙ってさっさと食いやがれ。』

打ち止め『偏食は体に良くないんだよ、ってミサカはミサカは昨日見たテレビの知識を披露してみたり！』

一方通行『……そかよ。つつてもまア好きなモン食って死ぬるンならむしろ本望だア。』

打ち止め『アナタが死んだらミサカが困るの！ってミサカはミサカは……ハッ！もしかして私がアナタにバランスの良く採れた料理を毎日食べさせてあげたら万事解決かも！ってミサカはミサカは自分の閃きに驚きを隠せない！！』

あア面倒なコトを言いだしやがった。

このクソガキが精々作れるモンつつたら目玉焼き（と言えるかはか

なり怪しいものだったが。(ぐらいなモンじゃねエかよ。
つってもンなコト言っちゃまって下手に刺激すンのも良くねエか。
つてこたアここは無難に……。

一方通行『おおお楽しみなねエ！卵の一つくらい満足に焼けるようになつたらもう一回言つてきやがれエ。』

打ち止め『この前のはたまたま失敗しただけなの！つてミサカはミサカは必死に体裁を良くしようとしてみたり……。』

一方通行『へエ、たまたまかよ。なら次の料理にや期待しといてやンよ』

本当はたまたまじゃないよ……。

ミサカは一方通行に、ファミレスのレトルトとは格別に違う美味しい手料理を食べさせてあげたかったな。

ミサカの記憶が正しければ、アナタはほとんど手料理を食べたことはないはずだよね？

だからミサカは美味しい手料理を作つてアナタにミサカの愛情を示したかったの。

だけど料理を舐めていたみたい。

料理なんか一度も作つたことがなかったのに上手く行くって思い込んでたな。アナタはそのことに気付いていたんだよね？

だから包丁も使わない、ただ焼くだけで済む簡単な目玉焼きをミサカに頼んだんでしょう？

まさかそんな簡単なものすら失敗してしまうとは……。ってミサカはミサカは自分に呆れ果てて何も言えない。

アナタは本当に優しいよね。

あんなに焦げてたのに残さず食べてくれた。

ミサカはいつもアナタの優しさに守られてばかりだね。

だからミサカはアナタに恩を返したいんだよ。

そしてもつと一緒に居たい。

打ち止め『ねえ一方通行、ってミサカはミサカは呼び掛けてみる。』

一方通行『何だア？』

打ち止め『もしもミサカが、本当に料理をいっぱい作れるようになったら、アナタの家に……毎日作りに行ってもいいかな？ってミサカはミサカは恐る恐る聞いてみたり……。』

一方通行『……ハッ。別に来てもいいぜ。毎日旨いモンが食えるならの話だなア。』

打ち止め『本当に！？ってミサカはミサカはぬか喜びにならないようにもう一回だけ確認してみる！』

一方通行『あア。俺はオマエらに嘘なんか付かねエよ。そこは安心

しとけ。』

あア。

俺は絶対にオマエを悲しませるようなことだけはしねエ。

どんなに下らねエコトでもオマエの希望は出来る限り叶えてやるさ。こんな俺にでもできることなら何でもなア。

打ち止め『アナタがそお言うなら間違いないよねわーい！ってミサカはミサカは帰ったら猛特訓しなくちゃ！！』

少女が喜びの声を上げ、決意を固めたときに一方通行の携帯が鳴った。

打ち止め『アナタの携帯が鳴ってるよ、ってミサカはミサカはニブニブなアナタに教えてあげる。』

一方通行『ダレがニブニブだってエ？あンま調子乗ってっとなさっきの話なしにすンぞ。』

打ち止め『それだけは止めて！ってミサカはミサカは懇願して……？あれ、どうしてアナタは顔をしかめてるの？』

一方通行の携帯にはメールが届いていた。
ただ、彼にとつては見たことのないような内容だった。
だから固まってしまったのだ。
彼の携帯には……。

『こないだアドレスを教えてもらった初春飾利です（ ）
本当に突然なんです、来週の日曜日は開いてますか？
実は直接会ってお話したいことがあるんです（＜―＞）
場所は Joseph's ってファミレスで12時にお願いで
きますか？』

こんなメールは初めてだア。
どう対処すればいいのか全くわかんねエ……。

そのまま固まっていたからだろう。
打ち止めは難なく携帯を彼の手から奪い取ることができた。
そして、液晶画面に表示されたメールを見てニヤリと笑った。

打ち止め『初春お姉ちゃんからのメールがやっと来たのね！ってミ
サカはミサカは喜んでみたり！！アナタはどうせ日曜日は暇でしょ

？問題ないよって送っておくね、ってミサカはミサカは……って携帯取らないでよ、ってミサカはミサカは憤慨してみる！！」

危なかった。

冗談じゃねエ。

何しろ今までまともに人と遊びに行ったりした経験なんか持ってねエ。

疲れるだけの場所に行くメリットもない。

大体何考えてやがんだア、あの花畑女は？

メールを返すつもりはない」メールしてきても無駄だ」メールしてくんじゃねエ、って解釈できなかったのか？

一方通行「こんなモン無視しときゃいいだろうが。」

打ち止め「それは駄目だよアナタ、ってミサカはミサカはアナタを諭してみる。」

一方通行「……あア？一体何が言いたいんですかア？」

打ち止め「ミサカが初春お姉ちゃんにアナタのデータを送った理由がわからないの？ってミサカはミサカはアナタに問い掛けてみる。」

理由……ねエ。

全然わかんねエなア。

こんな質問は考えて一発でわかんねエなら答えを聞いた方が手取り早エな。

一方通行『……わかんねエ。』

打ち止め『アナタならわかるはずだよ！ってミサカはミサカはアナタを信じてみる。でもヒントを言うなら、ミサカはアナタに足りないものを勉強してもらいたい、ってミサカはミサカは大ヒントを与えてみる。』

この第一位様に足りないモンだア？

むしろ第一位だからこそ足りないモンってコトかア？

……なるほどなア。

一方通行『要すんに、テメエは俺に社会勉強をしてきてほしいってわけだろ？』

打ち止め『その通りだよ！ってミサカはミサカは珍しく物分かりがいいアナタに感心しちゃったり！！』

一方通行『ハッ！んなモン俺がやるわけねエだろ。そろそろ帰ンぞ。黄泉川ン家まで送ってやる。』

打ち止め『待つてアナタ！ってミサカはミサカはアナタの腕を掴んで引き止めてみる！！』

一方通行『イイ加減にしゃがれよ……。俺がわざわざこんなコトやってやるわけねエだろオが!!』

打ち止め『これは私からのお願いなんだよ一方通行、ってミサカはミサカは静かにアナタに話し掛けてみる。』

クソガキからのお願い？

確かに出来るコトは何でもすると誓ったけどよオ……。

打ち止め『いつかアナタが大人になってこの学園都市から解放された時、今のまま生活していけると思ってる？ってミサカはミサカはアナタに尋ねてみる。』

確かに。

ソレはそオなのかもしれない。

いつかクソつたれな暗部からも、統括理事長からも、全てから解放される日を手に入れたとして、果たして俺は今のままで生きていくのかア？

打ち止め『これはミサカだけのお願いじゃないんだよ。黄泉川も芳川もみんなミサカの話に頷いてくれたんだよ、ってミサカはミサカ

は黄泉川達もアナタのことを考えてくれてるってコトを強調してる。』

……。

……。

打ち止め『まあ、本当はメールをすることで人との距離感を掴んでいこうって話だったんだけどね。いきなり会うのはキツいかな？つてミサカはミサカはアナタの気持ちを確かめてみる。』

まともに普通の人間と話した記憶はほとんどねエ。

さすがに直接会って話すのはレベルが高すぎると思う。

……だが。

俺はレベル5第一位の最強の一方通行様だろ？

これぐらい楽勝で片付けられるに決まってる。

答えは出たぜクソガキ……。

一方通行『……オイ。』

打ち止め『何？ってミサカはミサカは問い掛けてみる。』

一方通行『顔文字、絵文字の打ち方を教えやがれエ……。』

打ち止め『そ、そこまでしなくてもいいんじゃないかな？ってミサカはミサカはアナタの顔文字とか絵文字が想像できないんだけど……。』

一方通行『うるせエ！やるからには完璧にこなすんですウ！！テーマは料理、俺はメールとかのやり方を覚えて社会勉強、お互い目標が出来て良かったなア！！』

一方通行は半分自棄になって言った。

はからずも打ち止めの言葉のおかげで初春の携帯にメールが届くこととなった。

二時間もかけて出来上がったのは……。

『場所は知ってますよオ！日曜日はしっかりと開けておきますね』
^・・^ 〃

実に短い文章だが何度も推敲を繰り返し出来上がった会心のメールだった。

顔文字も吟味を繰り返した。

ただ一つ予想外だったのは……。

『ありがとうございます！メールだとかイメージ変わりますね
^O^)
』

送った2分後にはもうメールが返ってきてことだった。

一方通行『……。俺はとんでもない挑戦をしようとしてるのかもし
れねエ………………。』

一方通行は誰も居ない部屋でそう呟いた。

蛇足編（前書き）

読まなくても問題ない章です。

かなり作者の自己満に走ってます。

日曜編までの繋ぎです。

一方さんのキャラ崩壊が止まらねエ……。

蛇足編

あの人から返信が来た。

『場所は知ってますよオ！日曜日はしっかりと開けておきますね』
^・・^ 〓

ふふ。

全然イメージと違う。

口調までメールで再現してるのはあの人の性格なのかな？
あの口調に自覚があるのは小さな発見かもしれない。
日曜の話題にも使えそうだ。

これなら初めから気負う必要はなかったのかもしれないな、と初春
飾利という少女は思った。

とは言えそれは結果論だということは理解している。

実際メールが返ってくるまでは全然落ち着かなかった。

彼女は着信が鳴り携帯が震える度に緊張したし、表示された別人の
名前を見る度に失望と少しの安堵を感じていたのだから。

さて、何と返そうか。

答えやすい問い掛けにしてみようか。

『可愛い顔文字使っんですね（<|>）意外です！』

いや、これだと馬鹿にしているようにも感じるかもしれない。
ここは無難に……。

『ありがとうございます！メールだと何かイメージ変わりますね（
^o^）』

よし。

これなら返しやすくだろう。

送信……完了っと。

どんなメールが返ってくるかな？

メール返つてくんの早過ぎンだろオ……。

メールってそんなにスピード求められるモンなんですかア!?

このスピードが表の世界の常識ってヤツですかア!?

初っぱなから追い詰められるとはなア……。

さてどうする?

相手はできるだけ早い返信を待っているはずだよな?

質問事項は……メールだとイメージが変わる……か。

ンなモン個人の主観じゃねエか!

どう答えて欲シンですかア!?

どう答えりゃ正解なんですかア!?

クソっ……。

しゃあねエな。

本気になってやる。

一方通行はチョーカーのスイッチに手を伸ばす。

演算…演算……演算………!

駄目だ。

そもそもベクトル関係ねエし。

頭フルで働かせても国語能力、対人スキルが上がるわけじゃねエし

なア……。

自分で言っというてアレだが俺今スゲー悲しいこと言っていないですか
ねエ……？

クソッ。

手も足も出ねエ……。

八方塞がりとなった一方通行の下に最後の希望が舞い降りる。
ラストオーダー

ン？

クソガキからのメールか……？

『この時間に能力使ってるってことはメール返信に困ってるってことだよな？ってミサカはミサカは推測してみる！どんな内容かコピーして送ってくれないかな？ってミサカはミサカのアドバイスを送るためにお願いしてみる！』

情けねエ話だ。

最強のくせにメール一通もうてねエなんて笑い話にもなンねエよ。

……チッ。

次は一人で乗り切ってみせる。

だから今回だけは力借リンぞ打ち止めア！

コピーの仕方がわからなかった一方通行は文字、顔文字を一字一句同様に書き移した。

初春飾利という少女はメールを待っている間に眠ってしまった。携帯は手に握り締めたままだ。

彼女は一方通行がメール初心者だとは知らない。

だからメールが返ってこなかったことに意気消沈していた。

まあ誰も学園都市第一位がメールの返信に苦悩しているとは予想できないだろうが。

寝顔は少し悲しそうに見えた。

打ち止め『……ってことわかった？』ってミサカはミサカはメールのノウハウの説明を切り上げるよ。』

一方通行『……わかった。こんな時間まで悪かったなア打ち止めア。

』

一方通行のメールが遅すぎるので打ち止めは早々と電話に切り替えていた。

良い判断だったようだ。

打ち止め『これでもいいのメールには対処できると思うけど、アナタにはまだ足りないものがあるよ、ってことミサカはミサカは教えてあげる。』

一方通行『……多分アレだろ？メール打つ早さってかア？』

打ち止め『その通り！ってミサカはミサカは誉めてあげる！……って黄泉川がそろそろ眠れって言うてるから切るね、ってミサカはミサカは少し名残惜しいけど電話を切らなくちゃ。オヤスミ！』

一方通行『あア。本当に悪かった。』

スピードはその内付くかア？

ノウハウも完璧に頭に叩き込んだ。

クククカカキクケケ。

恐れることはねエ。

今すぐ返信してやっか。

おっと。

あんま遅い時間にメールすんのはマナー違反だったか？

明日起きたら送るとするかア。

一方通行が起きる時間は昼。

彼が知る由はなかったが、その時間は初春、もとい学園都市のほとんどの人物は学校にいる時間だ。

さらに初春にはジャツジメントの仕事がある。

一方通行は一方通行でいつ暗部の仕事が入るかわからない。すれ違う二人。

なかなか同じ時間に暇が出来ることはない。

それでも2人は少しずつメールを重ねていった。

素早くメールを返す必要はもうなかった。

他愛ない話題ばかりだが、少しずつお互いをわかっていく。

初春はもちろん、一方通行もメールに楽しみを見出だし始めた。やがて日曜が来た。

日曜・昼々夕方編

ついに日曜が来た。

初春飾利という少女はとあるレストランに居た。

約束の時間までまだ少しあるな。
早く来すぎちゃった。

店内の時計の針は11時30分を指していた。

店内には客が溢れていた。

その中には佐天涙子の姿もあった。

席の位置は初春の正面で、一方通行が来た後は彼を間に挟んで初春と向き合える席。

つまり、初春の表情の確認に特化した席だと言える。

なかなかいい趣味してるじゃないですか佐天さん。

本当に容赦ありませんね。

笑顔で手を振ってこないでください。

白井黒子は初春の代わりにジャッジメントの仕事を引き受けて今日
は来れない。

御坂美琴も、今日は何か用事があるとか言っただけだ。

白井さんには感謝しなくちゃ。

珍しいこともあるもんだと思ったのは内緒だけど。

御坂さんはやっぱり遠慮してくれたんだろう。

本当に優しい人だ。

それにしても緊張……かな？

喉がやけに渇く。

メールの感じじゃ話しにくいことはなさそうだったけど。

でも面と向かって話すのはやっぱり少し違うしな。

とまらないように気を付けないと……。

『……待たせちゃったか？』

一方通行の声が初春を我に返した。

一方通行『約束の時間の15分前に行つときや大丈夫って聞いてたんだがな？……』

初春『い、いや全然待つてないです。わ、私が早く来すぎただけで……。』

急いで取り繕った笑顔で初春は笑う。

放った言葉が何処か矛盾していることには気が付いていないようだ。

あちゃー。

初春のヤツいきなりどもっちゃったか。

まあ面白けりゃ別にどうでもいいんだけどね。

それにしてもあの白い髪で杖ついてる男が初春の命の恩人……？
写メ撮るのはさすがにまずいか。

一応私他人の設定だしね。
さて。

どうやって御坂さんと白井さんにメールする約束守ろうかな？
取り敢えずこの男の特徴を書き込んで送信……完了っと。

はあ。

そういうことですか皆さん。

佐天さんが現地で観察して逐一報告ってわけですね？

まったく皆さん抜け目がないですね。

会いに来てやったはイイが俺は一体何すりゃイインだア？

向こうは黙ったつきりだしよ……。

メールだったらわりかしスラスラいけるようにはなっただがなア。
やっぱ面と向かい合うと上手くいかねエか。

クソガキの事前指導によると、こんな状況になった場合は男の方から話を切り出すのが好ましんだったか……？

にしてもコレはマジで信用できんのかね？

待ち合わせ１５分前に行って相手を待つってのも見事に外れたしよオ……。

黄泉川に聞いた方が無難だったか……。

まア今更悔やンでも仕方ねエか。

よし。

覚悟決めンぞ。

『…………あのよ』あのつ。』

やっぱ役に立たねエ……。

まずい。

まさか同じタイミングで話し掛けちゃうなんて……。

それにしても本当に同じタイミングだった。

もしかして運命……ノノ

って何考えちゃってるの私！？

一方通行さんはそんな人じゃないでしょ？

佐天さんも見てるんだししっかりしなさい……！

それにしても笑いすぎです佐天さん……。

初春『す、すみません。一方通行さんも話し掛けてくとは思って
ませんでしたから……。』

一方通行『別に気にすんじゃないよ。ンで何か用があって呼び出し
たんだよなア？』

初春『そ、その、特にこれといった用事があるわけじゃないって言
ったら怒っちゃいますか……？』

はア！？

やっぱこの花畑わけわかんねエ！！

何だ何だよ何ですかア！？

呼び出したはイイが用はないだア！？

俺を試してるのか舐めてンのかキレさせたいのか……。
くっ……。

ガキとは穩便に済ますって約束しちまつたしよ……。。

もしかしてこれも表の世界じゃ普通なのかア……？

こりゃストレスが溜まって自殺するヤツも珍しくないわけだ。

俺には理解できねエ。

一方通行さん黙っちゃった……。

やっぱNGワードだったか……。

でも用事があるわけじゃなかったし。

普通に友達が日曜に集まっておしゃべりするって感覚だったんだけどな……。

さすがにレベル5だと私たちとは違うのかな？

御坂さんに色々聞いておけば良かったな……。

今日中にでもメールしよ。

おっと。

いきなり気まずい雰囲気ですねえ。

見てるこっちは笑いが止まらないけどさ。

初春オドオドし過ぎ。

その時佐天涙子の携帯が鳴った。

お？

メールが来たね。

御坂さんか。

何々？

目の色……？

何でそんなことが気になるんだろ？

この位置じゃわかんないしまった後でわかったらメールしよ。

初春『あの……。本当にすみません。私は何て言うか……。その……』

……。友達としてるみたいに、楽しくお話できたらいいなって思っ
てまして。結局あの時のお礼何か中途半端でしたし……。そうだ！
ここは私がお支払いしますから好きなだけ注文しちゃってください
よ！ー！』

友達……。か。

俺には縁がなかった話だなア。

やっぱ勉強にはなるみたいだなア。

にしてもちよつと気遣い過ぎだよなコイツ。

メールしてる時はもつとハキハキしてたがなア。

一方通行『……。オイお前。』

初春『は、はい！何でしょう？』

一方通行『……。お前は気遣い過ぎだア。メールしてる時みてエに
…そのよオ、もつとハキハキしろって言うのか？自信持てよオ。』

初春『そ、そうですか？すみません……。』

一方通行『だからよオ……。いちいち謝ンじゃねエよ。俺等は……
その……。』

初春『……。その？』

一方通行『……。友達、なんだろ？』

初春『そ、そうですね！わかりました！でもそれを言うなら一方通行さんもメールの時とイメージ違い過ぎですよ！あと友達ならお前じゃなくて名前で呼んでくださいね！！私には初春飾利って名前がありますから！！』

一方通行『……そんなつもりはねエンだなア。名前が……。次からは氣イ付けてやる。』

今回はどもらずに名前を言えた。

これは進歩かな……？

友達……。

一方通行さんもそう思ってた。嬉し。

嬉し。

嬉しいはずなのにな。

なのにどうして少し胸が痛むのかな？

一方通行『ンでよオ飾利イ。』

初春『はい……。ってどうして下の名前で呼ぶんですか！？』

一方通行『……あア？下の名前って何だア？お前は初春が姓で飾利が名だろ？なら名前は飾利で合ってンじゃねエか。』

初春『……。はいそれでいいです……。』

一方通行『何ですかア！？何か間違つてンなら教えてくれよ！てかイヤなら初春って呼びますけどオ！！』

初春『いや……。むしろそのままでもいいです！何も間違つてませんか
ら落ち着いてえ！！』

飾利と呼ばれた少女は顔を真っ赤に染めている。
胸がまたドキドキし始めた。
その理由は少女にはわからなかったが。

いや。本当はわからないフリをしているのかもしれない。
心の奥ではわかつているのかもしれない。
でも今はまだ……。

やっぱり昼時はファミレス多いわ。
初春が何か顔赤くしてるけど何言われたんだろね？
今度じっくり事情聴取しなくちゃ。

また携帯が鳴る。

また御坂さんから……？

まだファミレスにいるかの確認か。

居ます……送信完了。

そんなに気になるのかな？

てかもしかして知り合い？

知り合いなら目の色を聞いてきたのも頷けるな。

ってまた来た！？

『今すぐそっち行くから』

何かさっきからメールが変な威圧感出してるような……。
一体何なんだろうね？

一方通行『……つと悪いな。そろそろクソ……いや、知り合いを病院に向え行く時間だわ。話していると結構早く時間経つんだなア。』

初春『そうなんですか？なら一緒に一緒にしますよ！』

一方通行『イヤ……。そこまですなくてもいいわ。迷惑だろオし。』

初春『大丈夫ですよ！それに友達ならそんなこと気にしませんって！！』

一方通行『……そオなのか。なら付いてきてもイイか……。』

初春『ありがとうございます！』

あちゃー。

御坂さんが来る前にどっか行っちゃう雰囲気だね。

2人とも立ち上がったし。たし。

私もこっそり付いていきたいけど……。

わかってるって初春。そんな目で見てくるのは反則だってば。

御坂さんのこともあるしここで待つとくしますか。

そっいえば目の色見となくちゃいけないかったっけ？

お、白髪の人が振り向……。

赤目か。

なるほどね。

あれは特徴的だね。

御坂さんはどうせ来るしメールの必要はなし、と。

じゃあね初春。

佐天涙子は一方通行の後ろに続いた初春に小さく手を振った。

気付いてなかったのか敢えて無視したのか、初春からは何の反応も返ってこなかったが。

初春と一方通行はファミレスの外に出てとある病院に向っている。歩きながらも話が途絶えることはない。誰か一方通行を知っている人がその光景を見たなら間違いなく仰天する光景だ。

あの一方通行が笑いながら誰かと歩いている。

もちろん、笑い方はかなりぎこちなく不気味にも見えたが……。それでも間違いなく笑いながら誰かと歩いているのだ。一体何が起きたのか？もしかして明日地球が爆発するのか？真面目にそう思わずにはいられない光景だった。それだけ衝撃的な光景だった。

初春『それにしても一方通行さんが普通に話せる人で良かったです。』

一方通行『あア？そりゃどオいう意味だア？』

初春『いや、何かレベル5の人ってほとんど知り合いじゃないし、私たちとは話題とか笑いの壺とかが違うんじゃないかって思ってたので。』

一方通行『あア。そりゃレベル5に対する偏見……ってわけでもないなア。あんま関わらねエコトに越したコトはねエな。それより、気になる言い方したが……飾利、お前レベル5の知り合いでもいるのかア？』

初春『一応いますよ！常磐台の超電磁砲、御坂美琴さんです！！』

一方通行は思わず足を止めてしまった。

初春飾利は不思議そうに首を傾げる。

そオかよ。

年齢的にも予想はしてたがなア……。

あの実験のコトは……。

言う必要はねエか。

友達だからって教えるわけにはいかねエよな？

友達だからこそあんな世界に巻き込んじゃダメだ。

初春『あ、あの〜どうかしましたか一方通行さん……？』

一方通行『……いやどオもしねエよ。オッ、病院見えたな。携帯切つとけエ。』

初春『携帯切ってる人なんてほとんどいませんよ？』

一方通行『……飾利はジャッジメントで間違いないんだよなア？』

初春『わかりましたよ！ちゃんと切りますから！！』

一方通行と初春飾利が揃って病院に入ったのとほぼ同時刻、御坂美琴はファミレスに到着した。

おっ。

御坂さんが来たみたいだ。
にしても雰囲気がいいつもと違うような気がするな。
こっちに気付いたみたい。

御坂『ハア……佐天さん！初春さんは……ハア初春さんは何処！？』

佐天『だいぶ前に出ていつちゃいましたよ。』

何だろう。

息切らせてる。

目も怖い。

ま、まあ取り敢えず落ち着かせなくちゃ。

佐天『ま、まあまあまず水でもどうですか？』

御坂『……ハア。ありがとう……。』

佐天『あつ、そうそう目の色聞いてたじゃないですか？』

御坂美琴の動きが止まる。

無言で佐天涙子に話の続きを促す。

佐天『赤色でしたよ。』

やっぱりアイツだ。

間違いない。

杖付いてるってのがちよつと疑問だったけど、もう間違いない。
こうしちゃられない。

初春さんの安全を早く確かめなくちゃ。

御坂美琴は携帯を取り出して初春飾利に電話を掛ける。

だが。

携帯の無機質な機械の音声は電源が切られていることを告げるだけだった。

まずい。

初春さんの身に何か起きたのか？

それともこれから何か起きるのか？

どちらにせよ急がなくちゃ。

佐天『ちょ、ちょっと御坂さん！何があったんですか？』

御坂『何があったって、一方通行なんかと一緒にいること自体が危ないじゃないの！』

佐天『……え？一方通行って……確か学園都市第一位の……？それがどうして危ないことになるんですか……？』

ああそうだった。

佐天さんはあの実験を知らないんだ。

妹が一万体以上虐殺されたあの事件を。

告げるべきか告げないべきか……。

初春さんと佐天さんは親友よね？

なら知る権利はある。

あるはずだ。

御坂『……聞いてくれるかな佐天さん？全然楽しい話じゃないけどね……』

そう前置きして御坂美琴は忌まわしい過去を語り始めた。

日曜・夕方〜夜編（前書き）

少し重たい話になります。

あと、こっから先はヤンデレありだア。耐性ないヤツは帰ンな！

日曜・夕方〜夜編

一方通行と初春飾利が病院に入るとすぐに打ち止めが一方通行に飛び掛かってきた。

打ち止め『迎えに来てくれたのねアナタ！ってミサカはミサカは……ん？初春お姉ちゃんもついてきてるのね、ってミサカはミサカは少し意外に思ってみたり！』

初春『……前から気になってたんだけど、何でアホ毛ちゃん是一方通行さんをアナタって呼んでるのかな？あと、知り合いつてこの子のことだったんですね一方通行さん。』

打ち止め『だからミサカには打ち止めて名前があるの！ってミサカはミサカは何回も言ってるのに覚えてくれないお姉ちゃんに怒りを覚えてみたり！！』

一方通行『病院では静かにしやがれていっつも言ってるだろオがクソガキ！飾利もからかってやンじゃねエよ。』

打ち止め『……飾利って？』

一方通行『あア。コイツの名前だよ。なア飾利？』

初春『え？あ、はいそうですね。』

しまった。

まさかアホ毛ちゃんに会うことになるとは予想してなかった。
変な誤解されても仕方ないかも……。

打ち止め『……ふーん、ってミサカはミサカは意味深に頷いてみる。
早く帰ろつよアナタ！ってミサカはミサカはアナタを強調して促し
てみる。』

一方通行『お？おオ。何でトゲトゲしいんだお前？まアもオ用ねエ
し帰ンのは同意するがよオ。』

やっぱり。

アホ毛ちゃんの目付きが鋭くなっちゃってる。

一方通行『なら飾利も一緒に帰ンぞ。』

打ち止め『……！！』

ああ。

嬉しいんですけど今はアホ毛ちゃんを余り刺激しないで。
アホ毛ちゃんが何か口ばくばくしてて怖いよお……。

初春『えっと、私の寮こつからそう遠くないですし1人で帰りますよ。』

打ち止め『やつ、ゴホン。ほらお姉ちゃんがああ言ってるんだから2人で帰ろうよ！』ってミサカはミサカはアナタを急かしてみる。』

一方通行『イヤそオはいかねエ。……オイ飾利。確か友達に遠慮はいらねエンだよな？なら一緒に帰ンぞ。第一ここまで付き合わせちまった負い目もあるしよオ……。ほら、固まってないで病院出ンぞ。』

この計画には打ち止め達の思いが籠もってンだア。

絶対達成してやる……！

にしても何か打ち止めの様子が変なような……。

さっきも何か言い掛けたしよオ。

何だってンだア？

まア取り敢えず計画は成功に近づいてるはずなんだがなア……。

俺何か変なこと、もしくは間違ったことでもしたかア？

お姉ちゃんは一方向通行の何なのかな？ってミサカはミサカはとっても嫌な気分なんだけど。

アナタも何でお姉ちゃんの下の名前を呼んでるのかな？ってミサカはミサカはミサカは……。

ミサカは2人で帰りたいんだけどな。

断れない……よね？

付いてきた私が乗らないとさすがに変だし。

あっそうか！

病院出てすぐ違う道進めばいいんじゃない？

これで行こう！

てかこれしかないし……。

初春『じゃ、じゃあそうしますね。』

3人は病院の出口に向かう。

考えることは三者三様だ。

一方通行と打ち止めの日常は初春飾利という非日常が紛れ込んだこの日から少しずつ変わっていく。

そんなことが……。

まさか御坂さんにそんな過去があったなんて……。

佐天涙子は呆然としていた。

御坂美琴が話した凄惨な実験の内容に。

初春飾利が命の恩人と慕う、もしくはそれ以上の思いを抱いているかもしれない人がその実験の主犯だったと聞かされたことに。

御坂『……わかった？ 一方通行はそういうヤツなの。急がないと初春さんが危ないわ。』

佐天『……わかりました。急ぎましょう。』

御坂美琴、佐天涙子の2人は全速力でファミレスを後にする。

何処にいるかなんてわからない。

当てもまったくない。

それでも走り続けた。

初春飾利、一方通行、打ち止めの3人は無言で歩いていた。
普段なら打ち止めが五月蠅いのだが、今日はいやに静かだ。

何なんですかア本当に。

このクソガキは何でこんなに機嫌悪いんだよ。

テメエは明るいだけが取り柄だろオが。

わけわかんねエ……。

何で曲がり角が来ないんだろう。

こんな雰囲気耐えられない……。

いつもこんな雰囲気なの？

いや、行きのことを思い出すとそれは違うかな。

私はお邪魔虫って感じかな……？

そんなにアホ毛ちゃんって呼んだのがイヤだったのかな。

今度からはちゃんと打ち止めちゃんって呼んであげよう。

どこまで一緒にいる気なのかな？ってミサカはミサカは早くお姉ちゃんに離れて行って欲しいな。

友達を作って欲しかったけど、それ以上は期待してないんだよ、ってミサカはミサカはアナタにも後で色々聞かなきゃね……。

初春『あっ、ここ曲がったらすぐです。ここまでありがとついでに
ました！』

一方通行『おオ。ここなら結構近いわ。ンじゃまたなア。』

打ち止め『……バイバイお姉ちゃん、ってミサカはミサカは見送るね。』

初春『本当に今日はありがとうございました一方通行さん。またお話ししよう！打ち止めちゃんもこれからよろしくね！』

そう言って初春飾利は微笑みかけたが打ち止めはにこりもしなかった。

どういう意味でこれからよろしくなの？初春お姉ちゃん、ってミサカはミサカは齒軋りが止まらない。

しかもここ一方通行の家に本当に近いよね？ミサカだけじゃ監視できないかもね、ってミサカはミサカはミサカは……。

あれ？

やっぱり打ち止めちゃんが怖いオーラだしてる……。

機嫌も直してくれないし……。

本当にどうしちゃったんだろ。

打ち止めの様子が本当におかしいよなア？

まア黄泉川ン家まではまだあるし、その間に原因もわかるよな。
にしても飾利の寮俺ン家に本当に近いじゃねエか。
その内道端でひょっこり会ったりするかもなア。

打ち止め『ねエアナタ、ってミサカはミサカは質問があるんだけど
……?』

一方通行『あア?何だクソガキ。』

打ち止め『どうしてお姉ちゃんを下の名前で呼んでるのかな?って
ミサカはミサカはこれだけ聞きたいの。』

初春が別れ道で別れた後、打ち止めはこう切り出した。

一方通行『何でって……。友達じゃ普通って聞いたからよオ。』

打ち止め『下の名前で呼ぶのが?ってミサカはミサカは確認を取る
けど。』

一方通行『あ、あア。』

打ち止め『ならアナタが騙されてるだけなのね、ってミサカはミサカは安心してみたり！』

一方通行『騙されてるってどオいうコトだ！？』

打ち止め『つまりアナタは初春さんって呼んであげればいいのよ！
ってミサカはミサカは常識知らずのアナタにさん付けの重要さを教えてあげるね。』

一方通行『俺はやっぱりからかわれてたんだア……。クカカカ！
レベル5最強の第一位様をからかうってか。新鮮じゃねエか。友達
ってのは面白エモンだなア！！』

打ち止め『ちょ、ちょっとテンション上がりすぎだよ！ってミサカ
はミサカはどっちが保護者なのかわからない……。』

それにしても初春お姉ちゃんはどうな意図で下の名前で呼ばせ続けたのかな、ってミサカはミサカは考えなきゃ。

まあ次からは初春さんって一方通行は呼ぶはずだし何も問題はない
よね？ってミサカはミサカは安心してみたり。

だってずっと一緒にいるって約束したもんねアナタ、ってミサカは
ミサカは信じてるよ。

初春飾利は自分の部屋のベッドに倒れこんで初めて携帯の電源を切っていたことを思い出した。

着信…… 13件!?

スイッチを入れてすぐに液晶画面に表示された文字を見て初春飾利はたじろいてしまった。

御坂さんと佐天さんから……か。

一体何なんだろう。

あ。

そお言えば御坂さんには聞きたいことあったな。
なら御坂さんに電話しよう。

電話は1コールで繋がった。

御坂『初春さん今何処にいるの!?!無事!?!』

電話の向こうからはかなり切迫した雰囲気伝わってくる。
しかし……。

何故自分の安否をこんなに気遣っているのかわからない。
取り敢えず話を続けなければ意味がわからない。

初春『今は自分の寮にいますよ？もちろん無事です。』

御坂『……そっか。一安心したよ。』

初春『はあそうですか。一体何があっただんですか？』

全然話が見えない。

御坂『……初春さんが今日一緒にいた人って……一方通行って
名前じゃないかしら？』

初春『え！？何で知ってるんですか？』

何故御坂さんが知っているのか。

何故一方通行さんの名前が出てきたのか。

そして総合して考えてみると、『私と一方通行が一緒にいたから危ない』ということになるのだが……。
何が言いたいのか。

御坂『……初春さん。佐天さんにも話したんだけど……聞いてくれるかしら?』

初春『……はい。』

初春飾利は何故か胸騒ぎを感じた。
話を聞いたらここには戻れないような漠然とした不安。
だが御坂美琴は語り始める。
避けることはできない。
耳も塞げない。
塞いではならないような気がした。

話が終わった後、初春飾利はトイレに駆け込み胃の内容物を戻すはめになった。

電話を再び手に取ったとき、御坂美琴は初春飾利に告げた。

御坂『初春さん、今までの話は全部本当にあつた話なの。信じなくてもいいわ。アナタが話してくれた一方通行は確かに私の記憶の中の彼とは違う。でも過去は変わらないのよ。私は絶対に一方通行を許さない。それだよ。初春さんが彼とどんな仲なのか、どんな仲になりたいのかはわからない。でも私の話を踏まえた上でよく考えてみてね。それじゃ。』

そんなこと急に言われても……。

今日の一方通行さんからはそんな気配なんか微塵も感じなかった。

ただ不器用な人ってイメージ。

私のことを友達って呼んでくれた一方通行さんと1万人を殺戮した一方通行さん。

どちらのイメージを信じる？

いや、信じるも何もどちらの一方通行さんも本物なのか。頭が混乱する。

ただわかることは。

私と彼が今日のように笑い合える日はもう来ないかもしれないということ。

そして。

時折感じた胸の痛み。

そのほとんどが一方通行さんに関わっていた意味。
それは……。

この気持ちは……。
今胸に広がっている喪失感は……。

電話を切ると御坂美琴はベッドにうつぶせになった。

白井『黒子のエキスタっぷりな風呂が空きましたの、お姉様』

御坂美琴に反応する元気は残っていなかった。

白井『……すみませんでしたの。お取り込み中でしたか。』

御坂『……黒子私最低だ……。』

それだけ言って御坂美琴は泣きだした。

白井黒子はただ御坂美琴のベッドに腰掛け、泣く御坂美琴の頭を撫でることしかできなかった。

はア。

結局機嫌直って良かったが、あのクソガキ何考えてたんだか……。
エライ疲れた一日だア。

慣れないことするのは良くねエな。

まア直に慣れるンだろうがなア。

……確かクソガキの事前指導にや遊び行っただ後は無事帰れたか確認
のメール打ってってあったよな？
ンじゃそれ送っとくとするか。

初春飾利は泣いている。

電気も点けずにベッドに潜って。

何しろあまりに衝撃的すぎた。

アナタの命を救った少年は実は一万人以上を殺した殺人鬼なのです。

これが冗談ならあまりに笑えない。

でもこれは冗談じゃない。

それが少女を苦しめる。

現実なのにならで悪夢の中にいるかのようだ。

その時初春飾利の携帯がメールを受信した。

誰から？

また誰かが苦しめるの？

恐る恐るメールを開く。

一方通行からだ。

『無事帰れましたか？

また暇な時は一緒に遊びましょうね（、、（）』

わからない。

どの一方通行さんが本物なの？

こんなメールも送ってくる一方通行さん？

それとも……？

私はどうすればいいの……？

今日はもう寝よう。

もう全部がイヤだ。

今日はメール返ってこねエのかア？

まア俺も疲れたしなア。

寝ちまってンのかもなア。

まア明日になりゃメールも返ってンだろ。

今日は眠るとするか。

この日、初春、一方通行、打ち止め、御坂美琴の日常は崩れ始めた
のかもしれない。

変化編

メール送つてもオ三日も経つなア。

全然返つてこねエ……。

一体どオなつてンだか。

ツーか最近、携帯見ンのが癖みたいになつてやがるなア俺……。

そのせいで昨日は散々だったじゃねエか。

土御門『にゃー一方通行、一つ聞きたいんだが構わないかにゃー？』

一方通行『……あア？何だア？』

土御門『いやあ、最近の仕事が始まるまで携帯よくイジってるし、女でもできたのになつて思つてにゃー。』

一方通行『は……はア！？喧嘩でも売つてンですかア！？』

結標『……一方通行に限ってそんなわけないでしょ。』

土御門『いや、そうとも限らないぜい。やけにムキになつちやつてるのも怪しいんだにゃー。』

一方通行『……オーケー。そんなに死にてエなら遠慮すんなよ土御

門オ！』

海原『ま、まあ落ち着いてください一方通行さん。（結局被害被るのいっつも僕なんですから！）』

結標『……そう言われると確かにちよつとムキになり過ぎかもしれないわね。さあ、白状しなさい一方通行。』

一方通行『テメエ！いつもとキャラ違うじゃねエか！！』

海原『火に油を注がないでください結標さん！！（一方通行さんのこめかみがピクピクしてる……！）』

土御門『観念して白状するンだにやー、一方通行！……っと、仕事場に着いちまったか。また今度じっくり取り調べるとするか。まあ取り敢えずお前はその怒りをスキルアウトに向けてくれ。その方が仕事が早く終わるしな。』

一方通行『……コロスコロスコロス……。』

……思い出したくもねエ。

結局イイように使われっちまったなア。

それにしても。

俺は何でイライラしてやがんだア？

たかがメールが返ってこねエだけじゃねエか。

もしかしてアレかア……？
携帯依存症とかいう……病気みてエなヤツ？
……本当に情けねエなア。

腹減ったなア。

何か食い行くか。

一方通行はとあるファミレスに向かおうとした。
家を出て杖をつきながらゆっくりと歩いていく。

三日前に初春飾利と別れた道にさしかかった。

一方通行は何の気なしに顔を横に向けた。

一方通行は何かを見ようと思ったわけではなかった。

本当にただ偶然。

偶然その方向を見た一方通行の目には、見覚えのある顔の少女が走っているのが映った。

それも泣きながら。

後ろには友達だろうと同じ制服の少女もいる。

……『待つてよ初春！』

初春『近寄らないでください佐天さん！私はもう誰とも……！』

目が合った。

少女の目は驚きの色、戸惑いの色、そして恐怖の色へと目まぐるしく変化し、すぐに目を逸らした。

何も言葉を交わさぬまま。

笑顔を見せることもないまま。

少女は一方通行の方を見ずに駆け抜けていった。

……。

あの目は……。

……。

ハッ……くだんねエ。

よく見た目じゃねエか。

俺が化け物だつて知ったんだろオナア。

友達ごっこも終了ってわけだ。

まったくありがてエぜ。

これでシスコン野郎やシヨタコン野郎が騒ぐ種もなくなるしなア。

本当にありがてエぜ……。

本っ当にくだンねエなアオイ！

??? 『あ、あのお。すみません。』

一方通行 『……あア！？』

チツ。

ついカンじまった。

またビビった目してやがる。

確か……佐……天？

そんな風に呼ばれてたよなア？

佐天？ 『……わ、私初春の友達の佐天っていうんですけど……。』

一方通行 『何か用があんならさつさと言えよ。こっちは暇じゃねエんだ。』

佐天 『……あなたは……。気にならないんですか？』

一方通行 『何がだア？』

佐天 『どうして初春があなたを避けたのか、泣いていたのかについてです。』

一方通行『……別に興味ねエなア。』

俺が知ったことか。

それにどうせ答えは知ってんだ。

今更聞きたいモンじゃねエよ。

それn

佐天『ふざけないでくださいよ！初春の気持ちも知らないくせに！興味ない！？初春がどれだけ傷ついたのかも知らないくせに！！レベル5だろうが第一位だろうがそんなこと関係ないですよ！！少し話がありますから聞いてください！！！』

佐天涙子はこの三日間にあったことを、時折涙を滲ませながら一方通行に話す。

一方通行はただ聞くことしかできなかった。

佐天『……初春はあなたのことを本当に……。』

そこで少女は言葉を濁した。

その後に続く言葉はもうない。

ただ泣くだけ。

一方通行『……そオかよ。もオ話は終わりだよなア？じゃあな。』

一方通行は再び歩きだす。

佐天涙子ももう何も言わない。

ただ黙って見送るだけだった。

一方通行はとあるファミレスでいつものステーキセットを食べている。

ただ、いつもより食が進んでいない。

……腹減ってたはずなんだけどなア。

あの女……佐天とか言う女に会ってから何か調子悪イ。

終わったコトなんぞどオだってイイはずなのによオ……。

初春さんのあの目……。

完璧に俺にビビってたよなア……。

急に胸が苦しくなった。

コーヒーを一口飲んで平静を取り戻す。

何ツーか……。

この感じは……。

一方通行にはよくわからない感覚。

ただ強いて言うなら、打ち止めや黄泉川が襲われた時に感じた痛みに似ていると思った。

だけどそれとは何処か違うような……。

何が違うのかはわからないし確信もないが、とにかく一方通行はそう思った。

取り敢えず……。

俺は俺が思ってたより初春さんを大事に思ってたらしいなア。

まア、言ってみりゃ初めてできたお友達だモンなア……。

つっても今更もうどうしようもないンだがなア……。

打ち止めとか黄泉川なら俺は絶対に助けられる。

どんなヤツが相手だろオが絶対に守り切ってみせる。

そう絶対に……。

だがあの目は……。

俺を恐れている、拒絶しているあの目は……。

もオ二度と側には近寄れねエよなア。

ククク。

最強のくせによオ……。

また守れずに終わんのか？

愉快だわ……本当に……。

結局何もできねエ……。

俺は……。

俺は………。

不意に一方通行の携帯が鳴る。

……こんな時に仕事か？

それが打ち止め？

それが黄色泉川？

それか……イヤ、もオそれはねエよなア……。

一方通行は深呼吸をして携帯を手に取る。
開いてみると。

初……春さん……？

どうして？

そオだ、本文には何てある！？

『私の寮の近くの公園わかりますよね？

一方通行さんの家も近いはずですから。

今すぐ来れますか？

お話したいことがあります。』

場所は……頭に入っている。
でも何故？

自分を恐れていたはずなのに。
嫌われたはずなのに。

だが、ただ一つ言えることは。

俺にも変えられるモンがあるかもしれねエ……！
待ってる飾利イ！！

メールは返さず、彼は急いで店を後にする。
杖をついているとは思えないほど早く歩く。

彼の背中を押す気持ちが一体何なのかはわからない。
ただ一つ確かなことは、彼が初春飾利に一刻も早く会いたいと思っ
ているということ。

彼はまたスピードを上げた。

とある公園は静かな公園だ。
普段あまり誰も使用しないせいか、どの遊具もかなり錆付いている。
何もかもが新しい物づくめの学園都市ではかなり珍しい公園だった。

その中でも最も寂れて見える古いブランコに、少女は俯いて座っていた。

……着いた。

もう少し歩けば真正面に立てる。

だが一方通行はそこで歩みを止めた。

一体何て声掛けりゃいい？

初春さん……いや、飾利の方がも才頭に染み付いちまったか。

飾利を傷付けた張本人が一体何て言えばいい？

騙してて悪かった、とでも言うか？

無言の時間が流れる。

お互い何も話そうとしない。

目を合わせることすらない。

日はいつの間にかすっかり落ちてしまつて、公園の電灯が灯っていた。

空は雲が覆っていて月も、星も見えない。

時折点滅する電灯以外は完全な暗闇。

初春『……天気予報も当てにならなくなりましたね。今日は星が良く見えるはずでしたが……。』

先に沈黙を壊したのは初春飾利の方だった。

一方通行『……そオだな。』

初春『……何が正しいんでしょうね。何を信じればいいんでしょうか。』

……。

初春『私本当に何も知りませんでした。でも知ってしまった……。信じられない。でもそれは嘘じゃなくて……。』

……。

初春『……色々と単語は出てくるんですが、上手くまとめきれません。何を言いたいか分からなかったですよ？すみません。自分で呼び付けておきながら。最後にありがとうございました。話を聞いてくださって。でも…もう…これで……。』

俯いている表情は読み取れない。
だが声の震えが全てを物語っている。

一方通行『……一つだけ。一つだけ言っておきたいコトがある。』

一方通行はゆっくりとした口調で諭すように、優しく語り掛け始めた。

一方通行『俺が何したか……あア、そりや驚いたろオな。何しろ一万人以上殺しちまった大悪党だ。ソレ知った上で平然とはしてられないだろオよ。その過去は誰にも変えられねエ。だけどオ……。』

忌まわしい記憶。

一万人以上の妹達を自分の手で殺めてきた、おぞましい記憶。

当事者だからこそ思い出す凄まじい記憶。

あの実験の全ての映像が一方通行の頭をよぎる。

当然、最後の日の記憶も。

到底かなわないと知りながら立ち向かってきた、あのツンツン頭のヒーローのことも思い出す。

一方通行『未来は変えられるんだ。……打ち止め……わかるかな？
どうして俺は杖をついていると思う？笑うなよ。あのクソガキを助けるためだ。ソン時ドジっちまってこの様だア。ソン時から俺は能力使用に制限かかっちゃまって、30分も能力使用すりゃ廃人直行。このチョーカーの電池はも才俺の命みたいなモンだア。』

空からポツポツと雨粒が落ちてきた。

一方通行『別に、だから俺は善人だとか、罪は償ったとか言いたいわけじゃねエが……。そのよオ……。上手く言えねエけど……。』

いつしか雨は土砂降りとなっていた。

たったあれだけの言葉を伝えるのに長い時間を費やしてしまった。

一方通行にしては慣れないことをしているのだから仕方ない。

慎重に一言一言言葉を選んでいく。

一方通行「俺は昔のままの俺じゃない。例えば今の俺なら……ほら、こんな風に能力を使うこともできる。自分を守ることしかできねエと思つてた能力でもよォ……使い方考えりゃ誰かの役に立てるんだ。」

一方通行は初春飾利の背中に回つて、少女の体を包むような態勢になる。

チョーカーの電源を入れ、能力を使用する。

一方通行「こんなコト誰かに言つたのは初めてだわ。ついでに、電池の無駄遣いしたのもなァ。ただよォ……飾利、お前にだけには知つておいてほしかったんだァ。俺は変わったんだって……。」

とても拙い言葉の羅列。

だがここまで感情の籠もつた言葉はそうはない。

また沈黙が二人を支配する。

一方通行はその態勢を解かないまま。

初春飾利は俯いたまま。

結局俺は飾利に何を知って欲しかったんだろオナ。

あんなコト言ったのも、正直、考えたのも初めてだア……。

だが……。

実験を妨害されたあの日から胸につつかえてたのがやっと取れた。
結局はつきりとした答えじゃねエが……。

俺はあの時の俺とは違う。

……変わったンだなア俺も。

こんなクソみたいな人間でも変われるンだなア……。

初春『……一方通行さん。』

一方通行『……あア？』

初春『ありがとうございます。もう電池切ってください。私なんか
に使っていいものじゃないですよ。』

一方通行『……遠慮すんなよ飾利。俺等は友達なんだからよオ。』

初春飾利は泣き出してしまった。

一方通行『ちよつ、ちよつと待てエ！俺何か変なコトでも言いましてかア！？もオ友達じゃないって言っ』

初春『そうじゃ……ないです。あんな態度取った……のに、あんなに拒絶した……のに、また……友達って言ってくれて……嬉しいんですよ。』

一方通行『……そオかよ。』

2人は揃って公園を出た。

何も会話はないが、この沈黙は居心地の悪いものではなかった。

一方通行は初春飾利の寮まで彼女を送った後ゆっくりと家まで帰っていく。

いつしか雨は止んで月光が雲の切れ間から差し込んでいる。

友達……か。

案外イイモンだなア。

俺があんなコト言いだすとはなア……。

またメールできたらイイなア。

少女達の三日間編前編

今日は学校を休もう。

気分が悪い。

誰とも会いたくない。

佐天さんには悪いことしたなあ。

何回も電話とメール来たし。

でも応える元気がないよ……。

みんなに迷惑とか心配でかかいたくないけど……ね？

昨日の今日だよ？

立ち直れるわけがないよ……。

初春飾利はまた布団に潜った。

泣いていることが誰にもわからないようにするために。

白井『お姉様、朝ですよ！』

御坂美琴は白井黒子の声で目を覚ました。

御坂『黒子ありがとう。昨日のことも本当にありがとね……。』

結局昨日は夜遅くまで白井黒子が御坂美琴を慰めていた。

何か口を挟むわけでもなく、ただ話を聞く。いつもの白井黒子からは想像もできないほど、見事な聞き役に徹していた。

おかげで幾分御坂美琴は気が晴れた。

白井『お礼なんて……！黒子はお姉様の熱いベースで十分ですよ！さあぶちゅっ』

御坂『朝から余計な力使わせるんじゃないわよ！つたくアンタは本当にブレないわね……。』

御坂美琴は変わらずに接してくれる後輩の優しさに気付いていた。キスくらいならしてあげてもいいかな、と考えたが、実行すると後が怖いので止めておいた。

ただ本当に白井黒子には感謝している。

……私は間違ったことは言っていないはず。
でも……。
やっぱ初春さんは一方通行のことを……。
酷い事を言ってしまったのかもしれない。
もしアイツにもそんな過去があったとして、それを他人から聞かされたら私はどう思うだろう？

私の場合は……考えるまでもないわね。
初春さんなら……。

白井『お姉様。』

御坂『……何、黒子？』

白井『心配なさらずとも、初春は強い子ですわ。仮にもジャッジメントですから。』

御坂『……そう。ありがとね黒子。』

そつは言ったものの御坂美琴の表情は暗かった。

初春今日は学校休んでるみたいだね……。

無理もないよね。

あんなこと聞かされちゃね……。

電話にも出ない、メールも返してくれない。
どうすればいいんだろう。

佐天涙子は教師に、初春飾利は風邪を引いたのだと嘘をついた。

まあ、明日には良くなってるよね。

大丈夫……だよな？

また後で電話しよう。

また電話……。

佐天さん……心配してるよね？

でも……。

今は誰とも係わりたくないな……。

結局次の日も初春飾利は学校を休むことにした。

今日も初春来てないよ……。

何でこんな風になっちゃったんだろ？

初春にメールしたり電話しても無駄だし……。

今日は部屋に直接押し掛けてみよう。

さすがにこれ以上先生を騙すのは難しいしね……。

一応御坂さんと白井さんにも連絡しといて……いや、それは止めたほうがいいのかな？もうどうしたらいいかわかんないよ……。

アハハ。

何だか笑えちゃうよ。

私は結局何もできないのかな……？

そう思うと佐天涙子は泣き出しそうになってしまった。
親友の力になることが出来ない自分を恨めしく思った。

とにかく学校が終わったら初春の部屋に行こう。

あと私に出来ることなんてこれくらいしか思い付かないから……。

佐天涙子は初春飾利の部屋の前にいる。

二分ほど前からそこにいる。

張り詰めた表情でドアの前で静止している。

……もし、もしもだよ。

もしも初春が部屋に入れてくれなかったらどうしよう？
近づくことさえ拒絶されたらどうしよう？

ネガティブな思考ばかりが佐天涙子の頭を巡る。

明るいことが私の取り柄のはずなのにね……。

……しっかりしなきゃ。

私は初春を励ましに来たんだよ？

くよくよ考えても仕方ないよ。

深呼吸して……よし。

佐天涙子は初春飾利の部屋のドアをノックした。

佐天『初春いるよね？中に入ってもいい？』

佐天さん……。

心配して来てくれたんだ。

嬉しい。

でも……。

返事もないね。

でも拒絶されてるって感じじゃないし、心配する必要はなかったみたいだね。

ドア越しに話を続けてみようかな。

佐天『ここんとこ学校休みっぱなしだね。まったく私に感謝して欲

しいよ。先生には風邪って嘘付いてあげてるんだからさ。』

ありがとうございます佐天さん。
心配かけてごめんなさい。

佐天『……そりゃ初春の気持ちもわかるけどさ。私もあの話、御坂さんから聞いたし……。あんなこと聞いちゃったら……』

初春『……私の気持ちが本当に分かるんですか？』

声がこぼれてしまった。
もう隠せない。

初春『……佐天さんと私じゃ立場が違います。言ってしまえば……結局佐天さんは傍観者なんです。私は……私は……いえ、私にとつて一方通行さんは……。』

佐天『初春、今何て言った？私が傍観者って言ったでしょ。それ……』

…訂正してくれないかな？』

まさか三日振りに聞いた初春の言葉がこんなんだとはね。
少し悲しいよ。

佐天『一方通行さんのことをそんなに大切に思ってるとは知らなかったよ。私の言葉は少し配慮が足りなかったかもしれないね。それは本当にごめん。でも……傍観者……これだけは訂正してよ。』

泣いてる。

私の言葉で佐天さんを傷つけてしまった。

こんなことを言いたかったんじゃない。

多分一番私を心配してくれたのは佐天さんだろう。

わかってるのに。

わかってたのに……。

初春『……本当に私って駄目な人間ですよ、佐天さん。ごめんなさい。本当にごめんなさい。もう二度と迷惑かけませんから。』

初春飾利はドアを開けてそう言った。

泣いているような笑っているような、不思議な表情で佐天涙子にそう伝えた。

そして走って部屋を後にする。

呆氣にとられていた佐天涙子は反応が少し遅れた。

しかしすぐに我に返り親友の後を追って全力で走った。

泣きながら初春飾利は寮を後にした。

何処に行こうというあてもなかったが、今はとにかく一人になったかった。

佐天『待つてよ初春！』

無意識のうちに初春は一方通行と別れた場所に行く道を選んでいた。

初春『近寄らないでください佐天さん！私はもう誰とも……！！』

目が合ってしまった。

一方通行さん、驚いた目してるな。
多分私も同じ目をしてる。

彼は間違いなく私が知ってる一方通行さん。
私が……好きな一方通行さん。
でも本当の姿は……。
御坂さんに聞いた話は……。

駄目だ。

思い出したくない。

これ以上目を見続けられない。

初春飾利は結局何も言葉を交わさぬまま。

笑顔を見せることもないまま。

一方通行の顔から目をそらして何処かに向かって走り去っていった。

初春行っちゃった……。

目の前の人は……レベル5第一位の一方通行。
初春にとって大切な人。

佐天『あ、あのお。すみません。』

一方通行『……あア！？』

こ、恐い。

前にファミレスで見た時と雰囲気が違う。

佐天『……わ、私初春の友達の佐天っていうんですけど……』

一方通行『何か用があんならさつさと言えよ。こっちは暇じゃねエんだ。』

佐天『……あなたは……。気にならないんですか？』

一方通行『何がだア？』

佐天『どうして初春があなたを避けたのか、泣いていたのかについてです。』

一方通行『……別に興味ねエなア。』

佐天『ふざけないでくださいよ！初春の気持ちも知らないくせに！興味ない！？初春がどれだけ傷ついたのかも知らないくせに！！レベル5だろうが第一位だろうがそんなこと関係ないですよ！！少し話がありますから聞いてください！！』

つい感情を抑えきれなかった

佐天『初春は御坂さんから実験の話聞いたんです。私も聞きました。初春にとって貴方は……特別な存在なんですよ！わかってますか？』

一方通行は何も言わない。

ただ目だけをしっかりと合わせて佐天涙子の話を聞いている。その表情からは何もうかがえそうにないが。

佐天『……凄く凄惨な実験でしたよね。1万人以上の人を殺したんですから。でも……私、知ってるんですよ。日曜に初春の誘いに乗ってファミレスに来た時の貴方のことを。あの時、私は貴方と話している時の初春の表情をずっと見てたんです。』

一方通行の表情は変化しない。

佐天『あの時、初春はとても楽しそうでした。だから私は最初は御坂さんの話が信じられませんでした。あまりにイメージが違いましたから。あんな風に初春を楽しませることができる人が、まして初春を助けた人にそんな過去があつたなんて聞いても簡単に信じられ

ないじゃないですか……。』

坂天淚子はそこで一旦呼吸を置く。
昂ぶっていた感情がおさまりだす。

佐天『……初春はずっと貴方のことを探し続けていました。貴方は初春にとって特別な人なんですよ？……そんな大切な人が過去にどんな実験をしていたって聞いたら混乱するのも当たり前です。想いが大きかった分ショックも大きかったんですよ。……初春はあなたのことを本当に……。』

これ以上は私が言うことじゃない。

いつか初春が自分が伝えることなんだと思う。

話していて改めて気付いた。

初春は本当にこの人のことが好きなんだろう。
探していた時間が長かった分憧れも大きくなっているのかもしれないが、それを差し引いても言えると思う。

初春の気持ち……これで終わりになるのかな？

そんなこと……ないよね。

気が付けば涙が目から溢れ出していた。

一方通行『……そオカよ。もオ話は終わりだよなア？じゃあな。』

一方通行は再び歩きだす。

佐天涙子ももう何も言わない。
ただ黙って見送るだけだった。

少女達の三日間編前編（後書き）

更新遅いくせに話がまったく進んでなくて御免なさい。
センターが近いので次はもっと遅くなると思いますが、
呆れずに読んでやってください。

少女達の三日間編後半

……佐天さんもういないよね？

初春飾利は寮から少し離れた人通りの少ない道で足を止めた。

佐天さんにも一方通行さんにも酷い態度を取ってしまった。

二人には嫌われちゃったかな？

完璧に自業自得だ。

本当に馬鹿だった。

私はどうすればいいの？

初春飾利はとうとう頭を抱えて座り込んでしまった。

御坂『……初春さん。』

初春『……御坂さん。……どうしてここに？』

御坂『佐天さんに話聞いてすぐに寮を飛び出して初春さんを探してたの。』

初春『……すみません。』

御坂『別に謝る必要はないわ。佐天さんに頼んで初春さんの携帯に電話掛け続けてもらったから、その電波を追って走っただけだったの。だからあんまり大変じゃなかったし。』

初春『……そうですか。というか私が謝ったのはそういうことじゃなくて……』

御坂『初春さん。少し話を聞いてくれる？私がここに来たのにはもう一つ理由があるの。』

初春『……何ですか？』

御坂『一方通行のことなんだけど……初春さん、ごめんなさい。』

え？

何で御坂さんが急に謝ったの？

御坂『確かに私には初春さんや佐天さんに話したような過去があるわ。そのことで一方通行をとて憎んでる、この気持ちは今でも変わらないわ。』

……全然話が見えない。何が言いたいんだろう。

御坂『でも、私思ったの。私の気持ちを初春さん達に一方的に押し付けるのって、凄く酷いことなんじゃないかって。だって初春さん達が知ってる一方通行は私が知ってる一方通行とは違うんだからね。』

初春『……え！？一体どういう意味なんですか！？さっきから全然話がわかりません！！』

御坂『……つまりね。私が知ってる一方通行は過去の一方通行ってこと。昔の一方通行なら……初春さんを助けることも、まして、ファミレスなんか誘われて来ることもなんか絶対にしなかったはずなのよ。』

昔の一方通行さん……。
今の一方通行さん……。
同じなのに違う人……？

御坂『一方通行は変わったのかもしれないし、そうじゃないのかもしれない。……でも、初春さんを助けたのも、初春さんが……その、特別な感情……を抱いてるのも、抱かせたのも、全部一方通行だったことだけは確かなのよ。そこだけでも私が知ってる一方通行じゃない。』

御坂美琴はそこで一旦言葉を区切った。

御坂『だから……本当にごめんね……。』

やっと話が分かった。

でも今更どうすればいい？

私は一方通行さんの過去を知ってしまった。

だからさつきも逃げた。

もう……元には戻れないのに。

初春『……はい。でも、私を心配してくれたから過去の話を話してくれたんですね？』

御坂『……それは間違ってないわ。』

初春『だったら気にしないでください。私を心配してくれてありがとうございます。』

上辺だけの厚みのない言葉たち。
こんな言葉は御坂さんに失礼だ。

わかつているのに……。

御坂『……何かあったら連絡してちょうだい。今度は力になるから。あと、早く帰らないと佐天さんが心配するから早く帰りなさい!』

初春『はい! 本当にありがとうございました!』

元気が出たフリをする。

笑顔を取り繕う。

御坂さんが安心できるように。

……でも多分見透かされているんだろうな。

……初春さんを余計混乱させたかもしれない。
少し浅はかだったかもしれない。
無理して笑ってみせたりして……。

……今は1人にしてあげた方がいいのかな?

……全部私のせい……か。

ごめんね黒子。

今日もお世話になるかもしれないわ……。

初春飾利は御坂美琴と別れ、寮へ続く道をとぼとぼ歩いていく。
頭の中では御坂美琴から聞いた言葉がぐるぐる回っている。

……一方通行さん。
本当の貴方はどんな人なんですか？
私が想っている貴方で間違いない？
それとも……。

同じ思想の堂々巡り。
出口が見当たらない。

……もう一度だけ。

もう一度だけ一方通行さんに会いたい。
この近くに確か公園があるはず。
そこでもう一度一方通行さんに会おう。

初春飾利は携帯を取り出してメールを打ち出す。
宛先はもちろん一方通行宛で。

『私の寮の近くの公園わかりますよね？

一方通行さんの家も近いはずですから。

今すぐ来れますか？

お話したいことがあります。』

……来てくれるよね？

初春飾利はブランコに腰掛けて一方通行を待つことにした。

あまり使われていないのだろう、ブランコの鎖はところどころ錆び
ていて、少しの衝撃が走るたびに嫌な音をたてる。

でも今の気持ちには悪くなかった。

静かなベンチに座って待つことは何処か心細かった。

来た。

一方通行が公園の入り口に現われた。

やはり一方通行の白い肌は薄暗がりの中でもよく目立つ。
息を切らせて近づいてくる一方通行がはっきり見えた。

初春飾利は思わず目を伏せてしまった。

足音が止まった。

二人の間には気まずい空気が流れている。

……来てくれた。

でもどうしてだろう？

呼んだのは私なのに目を合わせられない。

口も動かない。

日が完全に落ちた。

公園には時折点滅する頼りない電灯があるだけで、月も星も見えない曇り空では何処か不安を感じてしまう。

……話し始めなきゃ。

せっかく来てくれたんだから。

来てからずっと、何も言わずに待っていてくれたんだから。
知らなきゃ始まらないのだから。

だから一歩踏み出さなくちゃ。

初春『……天気予報も当てにならなくなりましたね。今日は星が良く見えるはずでしたが……。』

一方通行『……そオだな。』

初春『……何が正しいんでしょうね。何を信じればいいんでしょうか。』

一方通行さんは何も言わない。
今、どんな表情をしてるのだろうか？
確かめる勇気はないけど……。

初春『私本当に何も知りませんでした。でも知ってしまった……。信じられない。でもそれは嘘じゃなくて……。』

上手く言葉にならない。

伝えたい気持ちは一杯あるのに、気持ちが溢れてしまって言葉にならない。

もう、いつそのまま全部をなかったことにしようかな。
こんな気持ち知りたくなかった。

出会わなければよかった。
知り合うことがなければ、ずっと憧れ続けるだけで終われたのに。

初春『……色々と単語は出てくるんですが、上手くまとめきれません。何を言いたいか分からなかったですよ？すみません。自分で呼び付けておきながら。最後にありがとうございました。話を聞いてくださって。でも……もう……これで……。』

これで……終わり？
私は本当に終わりたい？
結局何が知りたかった？
何を知ってどうしたかった？
もうわけがわからない。
ただ……何か悲しいな……。

一方通行『……一つだけ。一つだけ言っておきたいコトがある。』

一方通行はゆっくりとした口調で諭すように、優しく語り掛け始めた。

一方通行『俺が何したか……あア、そりや驚いたろオな。何しろ一万人以上殺しちまった大悪党だ。ソレ知った上で平然とはしてられないだろオよ。その過去は誰にも変えられねエ。だけどよオ……。』

こんな風にもしゃべれるんだ。

……優しい話し方。

だけど……何だろう？

一方通行『未来は変えられるンだ。……打ち止め……わかるよな？
どうして俺は杖をついていると思う？笑うなよ。あのクソガキを助けるためだ。ソン時ドジっちまってこの様だア。ソン時から俺は能力使用に制限かかっちゃまって、30分も能力使用すりゃ廃人直行。このチョーカーの電池はもオ俺の命みたいなモンだア。』

御坂さんが言ってたこととほぼ同じ。

一方通行さん、貴方は私が知っている貴方で間違いないんですね？
優しい一方通行さんなんですよね？

空からポツポツと雨粒が落ちてきた。

一方通行『別に、だから俺は善人だとか、罪は償ったとか言いたいわけじゃねエが……。そのよオ……。上手く言えねエけど……。』

そう言つて一方通行は少し考え込む。

次に一方通行が口を開いた時には雨は土砂降りとなっていた。

一方通行『俺は昔のままの俺じゃない。例えば今の俺なら……。ほら、こんな風に能力を使うこともできる。自分を守ることしかできねエと思つてた能力でもよオ……。使い方考えりゃ誰かの役に立てるんだ。』

一方通行は初春飾利の背中に回つて、少女の体を包むような態勢になる。

チョーカーの電源を入れ、能力を使用する。

ちよ、ちよつと一方通行さん恥ずかしいですよノノでも……。嬉しい。

一方通行さんは別に何も考えてないんだろうけど……。

一方通行さんはこんな行動もとれる優しい人。
そして私はそんな一方通行さんを信じられなかった人間。
よく考えてみたら、私には一方通行さんを想う資格すらない。
自分のことしか考えていなかった。

一方通行『こんなコト誰かに言ったのは初めてだわ。ついでに、電池の無駄遣いしたのもなア。ただよオ……飾利、お前にだけには知っておいてほしかったンだア。俺は変わったンだって……。』

暖かい。

ずっとこうされていたい。

ずっと一方通行さんに包まれていたい。

……でも。

私は一方通行さんがある意味裏切っていた人間。
そんな私が一方通行さんの腕の中にいる資格はある？
こんな言葉をかけてもらう資格はある？

初春『……一方通行さん。』

一方通行『……あア？』

初春『ありがとうございます。もう電池切ってください。私なんか使っていいものじゃないですよ。』

一方通行『……遠慮すんなよ飾利。俺等は友達なんだからよオ。』

友達。

あんな態度を取っていたのに。
疑っていたのに。

それでも友達と言ってくれた。
またやり直せる。

初春飾利の目から涙が零れだした。

一方通行『ちよっ、ちよっと待てエ！俺何か変なコトでも言いまし

たかア！？もオ友達じゃないって言うっ」

初春『そうじゃ……ないです。あんな態度取った……のに、あんなに拒絶した……のに、また……友達って言うてくれて……嬉しいんですよ。』

一方通行『……そオかよ。』

ありがとうございます一方通行さん。

実は最後の言葉は少しごまかしもあります。本当の言葉は今はいえないけど、いつかはつきりと伝えますからね。

初春『……まだ酷い雨ですね。少し雨宿りしてから帰りましょう。』

一方通行『……あアそうだな。何かさつきから鼻水が止まらねエ……クシュ。』

初春『ちょ、ちょっと大丈夫ですか！？風邪でも引いたんじゃない？』

一方通行『……風邪ってよくわかんねェんだよ。今まで全部反射だったから……クシヨン！何か額が熱イ……。』

初春『絶対風邪引いてます！雨が止んだら早く帰りましょうね！』

一方通行『……オオ。』

雨が止んだ。

通り雨のようなものだったみたいだ。

雲の切れ間から月が顔を覗かせていて綺麗だ。

一方通行は初春飾利の反対を無視して寮まで送ると言い張り、ついに初春飾利は折れた。

2人は黙って寮まで歩いていく。

正確に言うなら、一方通行が消耗しきっていて話せる状態になかったのだが……。

初春『ありがとうございました。早く帰って寝てくださいいよ？悪化したら絶対私に連絡してください！直ぐに看病に行きますから！』

一方通行『……ン。じゃあな……クシユ。』

……無理しちゃって。

全然大丈夫に思えないけどな。

まあ、家が近くにあるんだし……ね？

おいしいお粥の作り方とか調べておこうかな。

メール、次はいつ来るのかな？

とある公園に1人の少女がいた。
顔は御坂美琴と瓜二つ。御坂美琴との違いと言えば、ネックレスを付けていることくらいしか思いつかない。
そんな少女が立っていた。

??? 『……大体分かったよありがとう、ってミサカはミサカは……』

??? 『大丈夫ですか、上位固体。いつもの口調がでてませんよ、とミサカは鼻声でお伝えします。』

打ち止め 『……あ、ごめんね、ってミサカはミサカは10032号を労うね。今日はもう帰っていいよ、ってミサカはミサカは早急に対策を講じなくちゃ……。』

10032号 『では失礼しま……ックシュ。』

一方通行と初春飾利は、自分たちの言動の一部がミサカネットワークを通して感覚共有で打ち止めに漏れていたことに気付かなかった。打ち止めは一方通行が能力を長時間、それもずっと動かずに使用し

ていたことを疑問に感じたので10032号を公園に派遣したのだ
った。

打ち止め『……お姉ちゃんも一方通行が好きなの？ってミサカはミ
サカは疑問に思ったり。でも心配する必要ないよね。だって、一方
通行はミサカとずっと一緒にいるって約束したもんね、ってミサカ
はミサカは信じてるよ……？さて、お料理の勉強頑張らなきゃ！っ
てミサカはミサカのおいしいお粥をアナタに食べさせてあげるから
ね！』

少女達の三日間編後半（後書き）

久しぶりです。

覚えてくれてたら嬉しいです。

無事に受験が終わりましたのでまた更新していこうと思います。
これからも生暖かく見守ってくださいね。

風邪編

頭痛エ……。

目が覚めて一方通行はまずそう思った。
全身も何かけだるい感じがする。

鼻水もさっきからダラダラ垂れてきやがるし、額は熱いし……。

一体俺の身体に何が起きてやがるってんだよオ……。

学園都市第一位にして最強の一方通行が珍しく弱った表情を見せた。
昨日初春飾利という少女が注意していたことなど忘れてさってしまったようだ。

というか、余りの変化に焦ってしまっていると言った方が正しいのかもしれない。

何しろ彼は風邪なんかひいたことがなかった。
要するにまったく未知の体験が始まってしまったわけだ。
戸惑うのは無理もないとは言え……。

新しい実験でも始まったのか？それとも暗部が俺を括り付けるために何かを仕込んできたのか？いや……。

もっと平和な答えには辿り着けないものか。

クソつたれ！

これが学園都市が起こした何らかのアクションならクソガキが危ねエかもしれねエ！！

……いやクソガキだけじゃねエかもしれねエな。

飾利も最近俺とだいぶ長い時間過ごしてたしよオ。

クソガキは黄泉川ンとこにいるわけだし、そう簡単には手は出せねエしな。

万が一もある。

今すぐ連絡取らなきゃいけねエな。

俺みたいな人間に関わったせいで人生が狂っちゃまっちゃ悲劇過ぎるしなア。

彼は寝ていたソファから降りると、クラクラする頭で必死に携帯を捜し出して初春飾利に電話を掛けた。

一方通行が電話を掛ける少し前に時間を戻す。
初春飾利はパソコンでお粥について調べていた。

……結論ですが、結構どれも似たようなもんですね。

それはそうだ。

お粥はお粥。

創作お粥なんか聞いたこともないし。

発想の転換が大事ですね。

お粥の他のメニューについて調べましょう。

フードは……おいしい、消化に良い、栄養がつく……。

鰻重……？

おいしいし栄養価は高そうですがこれはさすがに……。
すりおろしリンゴ……。

これはなかなか良さそうですね。
食べやすそうですし。

結局調べた意味はあるのだろうか？
オーソドックスな病人食と同じだ。

それにしても一方通行さん本当に大丈夫でしょうか。
一応看護ができるだけの知識はたくわえましたが、何もないのが一番ですからね。

ここで初春飾利の携帯が鳴る。

電話、一体誰からでしょう。

表示された名前を見て少女は驚いた。
何しろ一方通行から電話がかかってくることなんか一回もなかったからだ。

と、取り敢えず電話に出ましょう。

初春『は、はいもしm一方通行』無事ですかア飾利イ、イイ!？』

初春『うひゃあ!え、えっと、はい大丈夫だと思いますが……。』
いきなり大声出されてビックリしちゃいましたノノ』

一方通行『そぶか。なら安心だア。ンじゃ切るぞ。』

初春『ちょ、ちょっと待ってください!』

一方通行『何ですがア?ごつちは忙しいンだけどなア!』

初春『凄い鼻声ですよ!間違はなく風邪が悪化してます!!』

一方通行『……風邪エ?』

初春『額とか熱いでしょ?あと身体が何か怠かったりしますよね?』

一方通行『……あ、ア、確かにずる。飾利は読心系の能力者だつたのがア?』

初春『違いますよ!誰でもできる推測です!!私が看病しにいきますから、動かないで待っててくださいね!!あと私の能力は定温保存ですから!!』

一方通行『……ずまねエなア。そオざぜでもらうわ。(定温保存つて何なんだア?)』

電話を切り、初春飾利は走って家を飛び出した。
さっそく調べた情報が役に立つときが来たようだ。……これが風邪
ってヤツなんですか？

初春飾利が携帯を切った後、一方通行はボーツとする頭でぼんやり
とそんなことを考えていた。

……クソガキに連絡する必要はもうねエってわけだよな。

……畜生！

……風邪ごときであたふたするなンぞ最強のやるコトじゃねエ！

……先に飾利に電話しといて良かったぜエ。

……あのクソガキの前じゃ最強って決めてるからなア。

一方通行がいつか誓ったこと。

何があるうと打ち止めを守りぬくこと。

いや、打ち止めだけじゃなく、黄泉川や芳川といった自分にとって
大切な人も守りぬくこと。

弱い自分なんかあり得ない。

彼女たちの前では最強で居続ける。

この誓いが今の一方通行を支えている。

ただ、その誓いは打ち止めたたちの想いとはずれているのかもしれない
のだが……。

……飾利が来るまで少し眠っとくとするか。
……そオいや飾りが家来るのって初めて……？

初めて？

家の場所教えたことあったか？

ないよな？

ンじゃあどオやってここまで来るンですかア？

俺はこんな簡単な問題にも気付かなかったンですかア？

風邪で回転が鈍っていた頭が急速に冴えていく。

……ヤベエなオイ！

……俺が苦しむのは別に構わねエ。

……だが飾利を苦しめてイイわけがねエよな。

……いつか別れたとこまで急いで行くしかねエな。

出来る限りの速さで杖をつきながら学園都市最強の第一位は歩いていく。

元々体力のない一方通行にとって38.4の熱はまさに強敵だった。
息は切れ、顔もみるみる紅く染まっていく。

それでも一方通行は一步ずつ進んでいく。

それは何故か。

答えは簡単。

いつの間にか初春飾利という少女が一方通行にとって大切な人にな
ってしまっただから。

自分が傷付いても、苦しんでも守りたい人となっただから。

だから一方通行の歩みはどんどん加速していく。

まさに一方通行。

彼の加速は止まらない。

風邪編 2

走って家を出たのはいいんですが……一方通行さんの家って何処にあるんでしょうか。

初春飾利は途方に暮れていた。

恋愛ドラマとか恋愛漫画なら迷うことはないんですが、現実はその上手く行きませんよね。

手掛かりといえば、いつか一緒に帰った時の記憶しかない。その分かれ道からどれくらい歩けば着くのかさえわからないのだ。よく考えずに行動すべきではないなと思いながら、初春飾利は一方通行の家があると思しき道を見渡す。

このままでは埒があきませんね。
一度電話してみましようか。

コールは続くのだが、一向に出る気配はない。

本格的に弱りました。

寝てるのでしょうか？

なら、留守電を残して少し買い物をしていきましょう。

『この前の分かれ道まで来れたのですが、そこからの道がわからないのを失念していました。この留守電を聞いたら折り返し電話してくださいね。』

初春飾利は踵を返してスーパーに向かって歩いていく。

寝てるのなら大丈夫でしょう。

起きた時にホカホカの食べ物っていうのがベストなんだろうけど、それはできそうにありませんね……。

それがちよつと残念です。

……クソツタレ。

……携帯忘れたまま家出ちまった。

一方通行がそのことに気が付いたのは家と分かれ道のちょうど半ばくらいの場所。

取りに帰るかどうか迷ったが、初春飾利がもう着いている可能性を考慮して先を急ぐことにした。

……いねエ。

……迷った訳じゃねエよなア。

……考えられる可能性は？家が分からずに帰った？家を探しにこの道を進んだ？まだ着いてない、くらいか？

……？は多分ねエな。

……飾利はそんなヤツじゃねエ。

……？もあり得ねエ。

……もしこの道を進んだんとすれば絶対にすれ違はずだからなア。

……？はあり得る。

……急いだ甲斐があつたつてもンだ。

第一位は側にあつた電柱に寄り掛かりながら頬を緩めた。
それは誰が見ても自然な笑顔、無邪気な笑顔だった。
そして、片手をポケットに突っ込んで目蓋を閉じた。

……たまには待つのも悪くねエモンだな。
……早く来いよ飾利イ。

間に合つたという安堵と熱と疲労から、彼はウトウトし始めた。
その顔は穏やかな表情を浮かべている。
まるで無邪気な子供のもようであつた。

まだ連絡来ないなあ。

買い物を終えた初春飾利がそう呟いた。
彼女はリングと卵と生姜と葱と……とにかく以前調べたネットの情
報をもとに、たくさんの物を買った。

まあ、風邪の時はぐっすり眠っちゃうものですしね。
取り敢えず戻りましょう。

彼女は知る由もなかったが、そこで30分程前から一方通行が初春飾利を待っている。

この日は本格的な冬の日ではないにしろ、かなり肌寒い日であった。だから初春飾利は彼を見付けた時、とても驚き、そして喜んでしまった。

私を待っていてくれたんだ。

白い肌がいつもに増してさらに白く染まっている。

寝顔見るのは初めて……。
記念ですし……いいですよね？

一体誰に許可を求めたのかわからないが、彼女は携帯のカメラ機能
をフル活用した。

初春飾利は暫くその寝顔を堪能した。

……って、こんなことしてる場合じゃないです！
いつから居るかわかりませんが、まず過ぎるじゃないですか！！

やっと理性が戻ったようで安心する。

彼女は一方通行を起こそうと肩を揺すりながら声を掛けた。

初春『……通行さ……一方……さん！起きてください！！』

一方通行『……ン。………！飾利！！』

初春『やっと起きてくれましたね。安心しましたよ。二度と起きないかと……。』

一方通行『勝手に人を殺すんじゃないエよ！だが助がっただぜエ。右手の感覚がぼんどねエからなア。』

右手は杖を握り締めていたせいもあって冷えきっていた。

初春『……！ちょ、ちよつと右手を拝借しますね／＼』

一方通行『？別に構わねエげど何する気ですがア？』

初春『私の能力定温保存を使うんですよ。』

一方通行『……？』

ポカンとしている一方通行を尻目に、初春飾利は顔を少し、いや、かなり赤らめながら一方通行の右手を自分の顔の側まで持ってくる。そして右手に暖かい吐息を吹き掛けた。

一方通行『オ、オイ！止めろ、くすぐってンだよ！！』

初春『も、もう少し我慢してください／＼』

息を吹き掛け、両手で包む。

この動作を何度か繰り返していく。

初春『……これで大丈夫ですよ。だいぶ暖かくなったでしょう？』

一方通行『確がにあってあげどよオ、こんなのすぐに元に戻っちゃうぜエ？』

初春『そうならなくするのが私の能力ですから安心してください。だから、その……。』

一方通行『……？何なンでずがア？』

初春『……家までずっと手を握らせてください！能力のためにです！ですから安心して大丈夫ですよ！？別に他意はないですよ！？』

一方通行『お、おオ。そ〇初春『いいんですか！？ありがとうございます！家までずっとですよ！？約束しましたからね！？早速握っちゃいますからね！？さあ〇一方通行『わがっだから落ち着げ！お前ぞんなアグレッジブギヤラじゃねエだろオが！！』』

一悶着があつたが、初春飾利は何か一方通行と手を繋ぎながら歩くことになった。

一方通行『（……手がずっとあつたけエまま？……定温、つまり一定に温度を保つこと……。なるほどなア。）やるじゃねエが飾利。』

初春『（自分から言い出したことですがやっぱり恥ずかしいもので

すね……。でも……エヘヘ／＼」

一方通行「……飾利？聞いてますがア？」

初春「……ハイ！？キ、キイテマシタヨモチロン……。」

一方通行「……何で片言なんですがア。」

二人は話しながら（何故か初春が1テンポ遅れてしまいが）ゆっくりと一方通行の家まで歩いていく。
それは微笑ましい光景だった。

風邪編3（前書き）

神裂ヤンデレSSの方にも書きましたが、長い沈黙失礼しました（+o+）

大学生になるって大変なんですね……。

ただ、これからはPC投稿に切り替えますのでペースあげれるかと思えます！

またまたよろしく願いしますね（^ー^）

風邪編3

一方通行『着いだぞ。ごこが俺が今住ンでる家だ。』

初春『失礼しちゃいますね。』

一方通行『才オ。』

家の中には家具と呼べる物があまりなかった。

ベッド代わりに使っているソファと机があるくらい。

ただそれも仕方ないのかもしれない。

スキルアウトどもに家を捜し当てられては破壊されるということを、彼は今まで何度も経験している。

そんな彼が家具は必要最小限の物以外を置くのは馬鹿らしい、という結論に至ったのは至極当然であろう。

初春『何かガランとしてますね。』

一方通行『……まアな。学園都市の第一位でネームバリューはながなおいじいらじぐでな。』

初春『あつ、私ちよつとキッチン借りてもいいですか？お粥とか作りますから。その間一方通行さんは休んでいてください。』

一方通行『……わがった。ズマンがちよつと寝ざぜでもらうぜエ。』

そう言うところ、一方通行はさつさとソファに寝転ぶ。
正直言ってもう限界だった。
すぐに彼の意識は闇に落ちた。

初春『……やっぱり無理してたんですね。いつから待ってくれてた
んでしょうか……。そういう優しさとか本当に大好きですよ、一方
通行さん。』

一方通行が眠ったのを確認して、初春飾利は静かに一人ごちた。

初春『ちよつと失礼しますね。』

そう言うって買い物袋から学園都市最新式の冷えピタを取り出し、一
方通行の額に張り付けた。

なんとこの冷えピタ、24時間も冷やし続けることができる。

さすが学園都市といったところか。

それはそうと、初春はキッチンに立ちお粥を作り始めた。

土鍋があるか心配だったが杞憂に終わったようだ。

というか土鍋は新品であった。

以前打ち止めと料理の約束をした時に、いつか使っだろつと買っておいた物であつた。

初春『さて、だいたいできました。』

見事なお粥が出来上がった。

本当に美味しそうである。

すりおろした林檎で作ったジュースもあり、至れり尽くせりだ。

初春『一方……つて、ぐっすり寝ちゃってますね。起こしちゃ可哀想ですかね。』

学園都市式最新冷えピタの効果は絶大なようだ。
本当にぐっすりと眠っている。

初春『……寝顔、やっぱり子供みたいです。』

なかなか見ることができない、完全無防備な一方通行の寝顔。
疲れと風邪という2つの条件が重なって生まれたレアな光景である。
それを2回も目にした初春飾利はとても運がいいといえる。

初春『……私もちよつと眠くなつてきちゃいました。』

初春飾利はソファを背もたれにして目蓋を閉じる。

初春『こついうのも……幸せ……です……ね。』

そして初春飾利はスースーと寝息をたて始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9051o/>

初春『あ、あの時はありがとうございました//』一方通行『.....あア？』

2011年5月14日16時38分発行